

辻勇樹さん

ACTUAL Inc. 代表取締役 / ART360° ディレクター。京都精華大学卒業後、慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科エクス・デザインプログラムにて競技用義足のデザイン研究に参画。その後、株式会社Granmaにて発展途上国でのデザインリサーチに従事。渡米の後、2015年より再び京都を拠点に活動する。2017-18年 京都国際写真祭にて展示マネジメントを担当。2018年より360°展覧会アーカイブ事業 ART360°ディレクター、同年 ACTUAL Inc.を設立。2024年に360度空間メディアインフラ WHERENESSをリリース、過去を追体験可能にする360度メディア普及の基盤構築を進める。

取材日時 2025年2月28日

場所 京都三条烏丸 ACTUAL Inc.オフィス

めちゃくちゃ本村さんには感謝しています。自分の国ではなく、外の国で居場所をつくるのだという、ハングリーさをベースに教わりました。今スタートアップをされていて、もともとゼロイチをやることはSFCでも教わってきましたが、ここまでリスクテイクしながらやってはこなかったです。リスクテイクしているのかどうかもわからないくらい、正直、衣食住くらいのレベルでリスクを取りに来ているというか、本村さんはリスクを取ることが生きる上での三大要素のひとつになっているように感じます。私がGranmaにいたのは25~26歳にかけての1年半くらいの短い期間ですが、それだけの期間で、経営のベースとなるハングリーさを身体知として得させてもらった感覚があります。

義足のデザインをしていた時に「世界を変えるデザイン展」を見に行つて、たぶんオーガナイザーだと思って声かけたら本村さんで、何度か話す機会がありました。卒業したら山中さんのところで訪問研究員しながら、フリーランスしようと思っていたんですが、たまたまそこで本村さんに出会ってしまって、本村さんに「ジョインしようよ」と言われて、ちょっと考えて、5秒くらいですが、労働条件も雇用条件も何も見ないでOKしてしまいました。それでもやりたいと思わせる世界観がありましたね。

Granmaにいた人は、みんな日本の中で生きていて何か閉塞感やリミッターを感じていた人たちだと思っています。私以外はみんなバックパッカーで、本村さんをはじめ、何か世界を能動的に見たいという欲求を原動力にして、自分の道を切り開いてきた人たちでした。

私はデザインやものづくりが専門で、大宇宙小宇宙があったときに、どちらかというと小宇宙の方に関心がありました。アフォーダンスが好きです。環境が人を誘導している、という概念ですね。目には見えない関係性とかに関心を持っていた。デザインエンジニアリングを勉強して、プロトタイプングを作りながら検証していくアプローチが素地にあるので、その点では近かったですが、ソーシャル 이슈や貧困の問題について、グローバルな課題をどうにかしようとはしていませんでしたし、当事者意識もなかったです。

Granmaに入ってから、社会主義運動とは何か、民主主義とは何かとか勉強するようになって、マルクスを読んだりしました。その過程でフランスのド・マンを読んでいると、マルクス主義を牽引していたのは富裕層だというのを読みました。ブルジョワが使用人をボコボコにしている様子を見てきて、子供ながらにおかしいと思ってきたのでしょうね。

Granmaには貧困層はあまりなくて、そんなに貧困を知らないと思うんです。ソーシャル 이슈をやろうとする人は、自分たちが豊かでいられることへの違和感を感じていて、それが耐えられな

かったのでしょう。だから関わらないといけなかったと思っていた。違うものを求めてマイノリティに接続していったのではないか。ある種の興味関心であったり、自分たちがいる世界への疑い、アンチテーゼの意味合いもあったのだらうと思います。

当時のGranmaという会社は、日本という国における20代の若者がグローバリゼーションのコンセプトに対して、日本のコンサバティブな社会の中でたまっている鬱憤を解放するためのちょうどいい対象だったのではないのでしょうか。現象的な会社だった。そこで出会った人たちとは今でも繋がりがありますし、その後に本村さんに紹介してもらった人とか、Granmaで出会った人のご縁があつて支援してもらっていますから、同様の課題意識を感じて生きていた人たちで共感性はあるのですね。

＊

私はGranmaで主にデザインワークをしていました。優秀なデザイナーではなかったですが、比較的なんでもできたとは思っています。日本財団の仕事、各イベントのビジュアル作ったりという有象無象をしていました。

一つ大きなプロジェクトは、サンヨー電気とのエネループの事業で、途上国にソーラーランタンをバングラデシュに普及するという仕事でした。実際にバングラデシュに行きながらエスノグラフィックの研究をかけて、プロトタイピングしながら、懐中電灯を自作で作って、3Dプリンティングなど使える技術を使いながら、大学院の後輩エンジニアに入ってもらって二人でやっていました。バングラデシュに2回ぐらい、パキスタンにも行きました。

1回目は本村さんが一緒に行ってくれて、現地のいろんな船で旅したりしました。それがまたやばい船で、ベッドの上に想像を絶する数のゴキブリを見ましたが、現地の人には上の客船で私たちは下の部屋でした。甲板のところはみんな雑魚寝をしていて。なぜかベッドのシーツがミッキーだかミニーマンだったのを覚えているのですが、寝ている時も体をゴキブリが這っている、あの絶望的な記憶。

2回目は3日目から放置されました。「明日から別の国行くから」と言われて、本村さんがいなくなって、翌日起きた日に嘔吐しました。現地のNGOの偉い人と打ち合わせが組まれていて。現地のソーラーパネルで女性のエンパワメントをしている代表の方でした。「こんな人にこんなやつ当てる？」という感じで。ぜんぜん乗り切れてなくて記憶もないです。「俺何してたんだろうな」と、近くを散歩したりしていました。

パキスタンに行った時は、本村さんがチフスにかかって死にかけてたので、バングラにいた時から飛行機の中で高熱で死にかけていて、パキスタンになんとか入れて。ずーっと倒れていましたね。パキスタンではあまり何もできませんでした。

文化理解から、そもそもの生活のリズム、収入、どうエネルギーを使っているのかを洗い出して、それを統計的にまとめて傾向を出していく。そこからこの生活にはリチャージャブルバッテリーを組み込んだLEDのハンギングライトを提案していく。現地の人のもので捉え方を感じて、シンプルに面白かったです。建物は建たないし、政権は変わるし、情勢は不安定。ゴミの問題もすごい。

家族のあり方としては、子供はみんな昼間工場に働きに行つて、帰ってきたら勉強をする。若い子もみんな英語を話せる。尊敬する人は誰ですかというアンケートを取ると、全員、家族の名前を上げていました。日本だったらイチローとか大谷とか言うじゃないですか。家族のあり方が全然違うんだなと思いました。情報や移動ができない(公共交通がなくて遠くに行けない)とか、オフグリッド地域で。人間って本質的にこうだったんだなと、プリミティブな生活を見ました。サンヨー電気がパナソニックに変わった時で、そのままプロジェクトも収束したのですが。

デザインって人間が生きていくための物事の成り立ちとか、ありがたとか、組み合わせ方を整理する、調和をとる術だと思っています。アフォーダンスの話にしてもそうで、ベンチの真ん中が凹んでいたなら人は寄り添いますし、環境を改善することによって、人間そのものの行動様式を美しくかつ心地よくコントロールするものだと思います。だから商業的に利活用するとマスマーケットになりますが、本質的には素晴らしい行為だと思っています。デザインと社会課題、ソーシャルイシューの親和性があったのですよね。だから惹かれたのもあったんだと思います。

SDGsはある種憲法のようなもので、それで世界は変わらないのですよね。結果として寄与はしていると思いますが、カーボンフットプリントもそうで、どこかで経済のロジックで消費されて終わる。グローバル化の最後の打ち上げ花火だったのかもしれませんが。グローバル化は終わってナショナリズムに傾倒し始めているじゃないですか。世界のことを考えようねというマインドセットから、「自分たち、それで本当に幸せなの？」という反対のベクトルが強くなってきている。

＊

人の自分ごとを自分ごとにする力が本村さんにはあります。デザインに対する考え方を話したときも、すごいスピード感で自分ごと化しました。それが基本的な行動原理になっていると思います。若い頃から自分の外にあるものと融合して自分の中に取り込みながら、それが本村拓人という人を形成してきたのだと思います。本村さんが自分を取り込んでくれる喜びもありました。能力を聞いてくれて、わかろうとしてくれる。究極の尊敬がある。それが今の仕事にもつながっているのではないかと思います。

そして自分が描いた世界が立ち上がっていくことに喜びを感じている。人との出会いを重要視している人ですし、そこから積み上がって、出会いが熱量を運びてきて、一つの物体が立ち上がってくるところにわくわくするんだろうなと思います。ある種のトランス状態に入って、何をしているのかわからないような状態になっています。

印象的なのは本の読み方です。飛行機で移動していて、何冊か持っていてずーっと本を読んでいる。たぶん人からお勧めされた本で、常になにか吸収し続けているのだと思います。タイ航空によく乗っていて、紫色のブランケットを頭にぐるぐる巻きにしながら本を読んでいる姿が思い浮かびますね、民族衣装みたいな巻き方をするんですよ。野生的な一面がありながら都会的な印象もあるので、ファッションも彼の一つの要素ですね。

本村さんの基本の大元はピュアなのですよね。育ちもそうですし、野生的な感覚ではない、学もありますし。普通に生きていこうとしたら生きていけたと思うんですよ。そのシティボーイさをかき消すくらい、予定調和で終わらせないために常に違うものと融合していく。周りからすると「これに集中してくれよ」と思うのですが、集中しない。次から次に出会っちゃうんですよ。上流の巨匠からものすごい末端まで節操なく融合してきていて、塊魂みたいなところがあるのですよね。アメリカの大学にいたときには、黒人のコミュニティの中にいたと聞きました。そこでのフレンドシップが民族意識や独特のバイブスを形成していく要因だと思います。普通、アジア人や白人のコミュニティに入ってしまうと思いますが、ブラックコミュニティに入ってしまうのが彼らしい。

本村さんは理性的になっていく私たち大人に対して逆行する存在なのですよね。Granmaを出てから10年以上経ちますが、本質は変わっていないなと思います。つねに童心に帰る気持ちがあって、本村さんの話をしていると昔の子供の頃の話をしているような感覚があって、「あいつおもしろかったよな」という感じです。大人は本村さんを求めてしまうという。理性的になる人間は、野生的な本村さんを求めてしまう。たまに知的な本村さんもいらっしゃるのですが、植物性は誰かが補う方がいいんですよ、みんな本村さんには動物性をもっと期待している。若干安定してきているのを感じます。いいことなのですがね。今でもやばいと思うのですけどね。人間として魅力的なのだと

思います。みんなが失っていくものを保持しようとする。みんな大好き本村さん、という感じです。

＊

人が自分自身にあまり責任を持ちすぎない社会、託しすぎない社会の方が豊かなのではないのでしょうか。インディビジュアリズム(個人主義)が都市化すると高まっていきます。集合して住むことでアパートが増えていく。集合住宅化していくことで、近くにいる人はセキュリティ的にリスクなので、一人の世界に収まっていくことになります。住める共同人数が減っていった、個人主義化していくことがコンフォータブルになっていく。交通網がその原因にあって、「日本改造論」や新幹線の影響で、エンジニアリング的には高効率でしたが、人がどんどん一人になっていった、人権が言われるようになっていった、個性やアイデンティティが言われるようになっていった。それって一人の人間に課すには重いのではないか。それってそもそも持つ必要あるの？ とすら思います。周りにいる人と、自分と、日々のインタラクションと、その連続でしかない。確固たる自分を定義する必要ってどこにあるのか。それが現代の人を生きづらくさせているのではないか。

文明は都市にあって、環境の変化を均質化してコンスタントにしていくことで、それによって心地よさを維持します。断熱材がたくさん入っている家と一緒にです。マクロに見ると滞留を妨げるので、みんな居心地が悪くなる。

東京に住んでいて感じたのは、街自体がダイナミズムを持っていて、一人一人のパーティクル、砂の一粒が巻き込まれていくような感じです。水泳の授業でプールをぐるぐる回って渦巻きができて、もう自分で動かなくても回っていくようになるように。自分の意思でどの道を歩くか、どこに泊まるかなど、意思決定の機会がすべて奪われる。情報過多もありますし、能動性が阻害されます。それでも「あなたはオリジナルであれ」と言われる。それは無理があることだと思います。都市構造としては歯車のように動いているのに。無茶苦茶な話です。その違和感に気づいている人が異常に少ないことが社会の病気だと思っています。

自分たちの世代って特殊な世代です。ミレニアル世代にあたりますし、世界を背負わされて、これからの日本を背負えと言われつつ、あらゆるものがドラスティックに変わってしまいました。劇的にインフラが変わっていく中で、そもそも学んできたことがその先の時代に使えないという、用意しても使えない時代です。

親もどういう時代になるかがわからないから、レールを引くこともない。引きようがない世代だったのだと思います。比較的自由にさせてくれていた家の子供たちでした。ある種もがいているのを継続してしているのかもしれませんが。素晴らしい世界であると思いながらも、一方で何か違うとも思っている。その変化にコミットしたい。自分がイメージする世界を見たいという、静かな欲求があるのだと思います。

いま私はアートのアーカイブを仕事にしていますが、アートが素晴らしいのは一義的な答えを出さないことです。今日はどうだし、明日は違うかもしれない。文化とは波乗りだと思っていて、街路に生えている柳のようで、ずっと風に揺られながらもそこにいる。

事業の中でなぜ文化の保存をするのか、それも信じられないくらい借金背負いながらやっているのかというと、自分がネガティブだと感じる世界に自分の子供を育たせたくないからです。言っても気づかなかった人がたくさんいます。伝わる人と伝わらない人もいます。変な言い方ですが、可哀想だなと思います。もっと自由に生きられるのに、もっと自分の可能性ってあるはずなのに、それを閉じてしまっている。

＊

伝統工芸にしても芸能にしても、時代によって求められるものは変わってきています。地域におけるエコシステムの中で、すべてが繋がっているからこそ成立していた文化が、現代では断ち切られるようになってきた。つまり、エコシステムの中だから回っていたものが、文化の存続のために個々に支援を求めなければならなくなっている現状があります。

今たまたまそういう時代だからかもしれませんが、この現状の中で、これからの時代においてどうしていくのか。もう一度エコシステムを作り直すのが一つ、社会の需要的にもエコシステムはもう作れないから単独で頑張るしかないというのも一つです。

文化は何を守って、受け継いでいくべきなのか。私が行き着いたのは、結果として残ったものが文化ということです。文化とは土です。語源はラテン語のcolere、英語のcultivateからきていて、つまり耕すことが文化です。一体何を耕しているのかというと、人間が生きてきた歴史です。歴史を年表的に右から左に横軸で描こうとすると前と後ろが生まれるので、背後は過去であって自分たちは未来に向かっていく、という観念になります。しかし、歴史を横軸ではなく縦軸で描くと、地層になるのです。

時代ごとに残るものと残らないものとがありますが、そこには競争原理が働いて、残らないものは消えてしまう。その時代において観測できるものしか、私たちは文化として認識できないわけです。もっと素晴らしいものや面白いものは過去にあったかもしれませんが、地層の中に埋もれています。それを探するのは考古学の役割です。

アーカイブについては仕事柄よく考えますが、未来において残したいと思ったものが残ることが大事です。京丹後の和久傳さんとの仕事の中で、地域の村の手伝いをしていたことがあります。その地域にはずっと続いている花火大会があるのですが、住んでいる人がその花火大会について言っていたのは、「無理してもつづかないんだ」ということでした。みんなでお金を出し合って、観客も誰も呼ばない。「けれど世界でいちばん近くで花火が見られるんだ、自分たちのためのものだから続くんだ」というのです。

そこから思ったのは、無理して続けている文化は、その時点でもしかしたら文化ではないのかもしれないということです。特に伝統文化において、継続しないといけないという社会的なプレッシャーのもとにある人はそれは大変なことです。しかし、人の人生は一回限りで、その人にとっての人生があるわけです。人の幸せが何かはわかりませんが、「いま現代における文化」から人は解放された方がいいと思っています。

文化が残ってきたのは活版印刷以降です。それまでの文化は消失していきました。戦争があったり天変地異があったり政治体制が崩壊したりして、なくなっていくことが自然なことで、文化は時代と共に忘れられてきたものでした。

今は平和な世界になって、保存する技術や記録する技術がどんどん残ってきて、文化が残り過ぎているのです。残り過ぎた文化を生かさないといけないんだという、自分たちが自分たちで作ったルールで首を絞めているのではないのでしょうか。文化がなくなっていくとは言いませんが、文化がなくなることは自然なことであると思っています。

ただし、思い出せることは重要です。ドラッカーが言っていたのは、「人間にとって一番の目的は誰かに覚えてもらうことだ」と。人間は短いタイムラインにおける点でしかないわけで、自分が生きた足跡を残すこと、つまり子供を残すことや家族に覚えておいてもらうこと、書物を残すことなど、覚えておいてもらうことが人間の目的になるのです。文化がなくなることはやむを得ないことで、国が税金で支援し続けるには無理があります。

文化って、そのものが権威化し過ぎて、まるでエンジニアリングされているようです。現代では記録が低コスト化されて、保存収蔵できすぎてしまうというところが、自分たちの首を絞めているところがあるのです。過去数百年にわたって、これだけ大量のことを維持保存できている時代はこれまで

歴史上叶わなかったことです。本来なくなることが自然だったものを、強制的に生きながらえさせているような感じがします。このあとどれくらいできるのかというのは、誰も未知の領域です。

なぜ人はコレクションするのだろうかと思ったんですよ。收藏品ってアーカイブして保存するだけだと、それに何の意味があるのだろうかって考えて。経済的に不安定になっていく中で、儲かった時に得たものを保存コストも考えると維持できない。

コレクターはコレクションの整理をして、オークションハウスに出したりもしますが、今後の人口減でほとんどのコレクションを持っている富裕層世代が亡くなっていったらどうしていくのか。長い時間軸の中では自然災害も多数起きます。たとえば南海トラフが起きたらどれくらいの文化財が失われてしまうのか。だから少なくとも覚えておく必要はあるだろうと思っていて、ネガティブな話だけれど、生前葬的な話で考えているのです。

私の会社ではその過程で、三次元化技術を使いながら、收藏品を三次元的に記録して教育利用したり、地域の人で共同保有できる形を作ろうとしています。そのとき素晴らしい体験は自分たちのこの体で享受しておこう、それによって喜ぼう、なくなるものはなくなるんだ、思い出せるようにだけしておこう、それでいいんじゃないかとも思いながら活動しています。

アーカイブは権威そのものです。そして信仰です。現代的にいうと、「イタバ」ってわかりますか。痛いバッグのことで、韓流のバッグなどをたくさんつけたオタクのバッグです。オタクってグッズをコレクションしますよね、あれは信仰です。自分が好きで尊敬している「そのもの」によって、自分自身が定義されます。アイデンティティが確立するのです。しかも対外的に定義されるので、自分自身で自分を定義するよりも楽です。いわば、自分が不安な時にお祈りして助けてもらうわけです。人間って自分を確固たるものとして定義できないものなのですよ。不条理に直面したり、自分ではなんともならない時に祈るわけです。弱い時に助けてほしいのです。

宗教はアーカイブの権化です。キリスト教もすごいコレクションを持っていますよね。彼らにとって、残すことは権威をつけることで、自分たちのストーリーをより豊かにすることです。今を生きている人間は過去にはアクセスできないので、改変できない事実が積み上がっていった、その事実が雄弁に語ることができ、視覚的に人を魅了することができる、何よりも強い説得材料になるのです。「何がすごいんですか？」と問われた時に、「時代を超えて残ってきたでしょう」と言えるわけです。過去から現代に至るまで記録をし続けることによって、終わらない小説のように書き続けている仕組みなのです。

古墳もまたミュージアムそのものです。土偶であったり、当時の価値のあるものを集積することによって、亡くなったものへの敬意を向けてきたのです。アーカイブという行為によって神が顕現する。自分たちの権威を集合させることによってです。土着的な宗教も同じで、生贄を捧げることによって神が生まれることと一緒に、捧げることで、神的なものを自分たちの上位に置く。

永続性に対して人間が承継を意識するのは、人間の有限性がベースにあって、自分たちが生きる時間よりも長く生きられるものへの憧れや畏怖があるわけです。文化界の人は、自分たちの安定した生活をないがしろにしながらも、そこに生きる意味を見出す、荒唐で不思議な自己矛盾を孕んだ生き物です。生命の存続、種の存続を考えるとそうはならないはずなのに、それとは違う行動原理がある。そういう意味でも人間って興味深いですよ。

(聴き手:酒井一途)